

英語学

長谷部 陽一郎

現代の英語学研究において構文文法は最も重要な理論的枠組の1つとして挙げられる。構文文法は形態素や語の組み合わせを構文 (construction) として捉え、言語の文法をそれら構文のネットワーク構造として考える点に特徴がある。そのような構文文法における第一人者として大きな影響力を持つのがプリンストン大学の Adele Goldberg である。1995 年に出版された *Constructions* は、構文がそれを構成する要素の単なる集合ではなく、変項を含んだ「パターン」として、それ自体が意味を持ちうるという事実を明らかにした。また様々な構文が継承関係のもとに有機的な結びつきを持つことを示した。

こうして言語の文法における構文の重要性を明らかにした後、次に Goldberg が手がけたのは、言語話者における構文の習得および発達の詳細の探求であった。実際の被験者を用いた心理実験やコーパスを用いた実証的研究を重ね、Goldberg は 2006 年に次なる単著 *Constructions at Work* を発表する。「建設中」を意味する定型表現 “construction at work” から想起されるように、それは構文の習得・発達に関する現在進行形の研究成果を概観させるものであった。そこで示されたのは、構文の獲得には環境の中で当該のパターンが生起するタイプ頻度 (type frequency) と、他のパターンとの競合関係における先取性 (preemption) が重要という指摘であった。先取性と

は、しばしば生物学における生態的地位 (ecological niche) と関連づけられる概念である。ある文脈における対象が一定のカテゴリーとして認識され名付けを得るならば、その表現が得た先取性により、論理的には同じ対象を指しうる他の表現は何らかの側面において異なる意味を持つことになる。Goldberg によると、他ならぬこの先取性の存在によって、母語習得の最中にある子供は、競合する複数の構文の関係性を見極め、ネットワークとしての文法を脳内に構築することができる。

このような考えに基づいて行われたいくつもの研究をまとめた Goldberg の 3 冊目となる単著 *Explain Me This* が 2019 年 2 月に出版された。この “explain me this” という表現は、実は自然な英語ではない。英語の二重目的語構文では “tell me something” のように言うことはできるが、“explain me this” とは通常言えない。少なくとも大人の母語話者は直観的にそう感じる。しかし、こうした表現を口にしてしまう話者は存在する。非母語として英語を学ぶ大人の学習者たちである。本書では、子供の構文使用が大人の母語話者に比べて保守的であり、言語的生産性に乏しいこと、そして大人の外国語学習者にとっての困難が構文の先取性に大きく関わっていることなどが論じられる。構文という概念の理論的重要性とその発達・定着の道筋を鮮やかに示してきた Goldberg は、ここに来て新たなステージに到達したと言える。英語学研究における氏の影響力はさらに増していくものと思われる。

(同志社大学)